

を施行中である。

21) 食道癌肉腫の1例

桑原 史郎・鈴木 俊繁
武者 信行・植木 匡
岡 至明・鈴木 茂
武藤 一朗・西巻 正力
藍沢喜久雄・鈴木 力
畠山 勝義 (新潟大学第一外科)

癌肉腫は同一腫瘍中に癌腫と肉腫成分が混在する悪性腫瘍で、食道に発生するものは希である。今回我々はきわめて急速な発育をきたした食道癌肉腫の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。症例は64歳男性。1993年8月より嚥下困難が出現し、10月6日近医に入院、精査にて食道癌と診断され、11月2日手術目的に当科入院となった。画像診断では胸部中部食道から胃におよぶ粘膜下腫瘍様の巨大隆起性病変を認め、生検で spindle cell carcinoma と診断された。11月25日非開胸食道抜去術を施行した。病理組織学診断は、『いわゆる癌肉腫』(so-called carcinosarcoma)であった。術後経過は順調であり、50.4 Gy の術後照射を行い退院した。

22) 胃癌術後の腹膜播種に化学療法が奏功した1例

川上 一岳・川合 千尋
大谷 哲也・藤田みちよ (日本歯科大学)
吉田 奎介 (新潟歯学部外科)

症例は41歳の女性。1991年7月、他院で胃癌のため胃全摘術を受けた。術後、CDDP+5-FUを2クール施行し、その後は外来で follow up していた。同年11月頃から CEA が上昇し始め、93年1月には Schnitzler 転移が明らかになった。腹水も生じてイレウスとなったため、同年7月当科に紹介された。イレウス管を挿入したが症状は改善しなかったため化学療法を施行した。まず腹水 2,000 ml を排除した後、CDDP 100 mg を腹腔内に注入した。同時に 5-FU 500 mg を5日間静注した。その結果、腹水が著しく減少したため、さらに CDDP 100 mg, 5-FU 500 mgx 5日をとともに静注で2クール施行した。9月末、イレウス管を抜去し、経口摂取を開始した。11月に1クール追加した後に退院した。以後、外来に通院していたが、94年4月に強度の下痢を生じたため、さらに1クール施行したところ、症状は改善した。イレウス発症から約1年経過した現在、経口摂取は良好

で、体重減少もなく、元気に自宅で生活している。

23) 大腸癌肝転移症例の治療経験

加藤 英雄・新国 恵也
野村 達也・吉川 時弘 (厚生連中央総合)
佐々木公一 (病院外科)

大腸癌肝転移症例に対する肝切除および肝動注の意義について検討した。【対象および方法】1989年1月より1993年11月までの間に、当科で手術された大腸癌 429例のうち肝転移を認めた56例(同時性33例, 異時性23例)を対象とした。肝転移に対する治療法を以下の4群に分けて比較検討した。I群: 肝切除のみを施行した7例, II群: 肝切除に加え予防的肝動注を施行した12例, III群: 肝切除を行わず肝動注のみを施行した12例, IV群: 肝転移巣に対して局所的治療を行わなかった25例である。【結果】① 肝切除後に予防的肝動注を施行した群の生存率は有意に良好であった。② 肝切除19例中11例(53%)が生存中で、うち7例は無再発である。12例に再発(腹膜再発4, リンパ節再発7, 肺転移2)がみられ、残肝再発が確認された症例は5例(41.7%)であった。③ III群12症例中 CR 1例, PR 4例を認め、奏効率は41.7%であった。また、III群とIV群の比較ではIII群で有意な生存期間の延長がみられた。

24) フローサトメトリーによる頭頸部腫瘍のリンパ節転移と化学療法の効果の関係について

J.W. Mahmood
鈴木 克也・野村 務 (新潟大学歯学部)
新垣 晋・中島 民雄 (口腔外科)

25) 温熱療法が著効した手術不能進展口咽頭癌の1例

—放射線動注化学療法併用—

長島 克弘・鶴巻 浩
星名 秀行・小柳 広和 (新潟大学歯学部)
大橋 靖 (口腔外科)

従来より巨大なリンパ節転移を有する症例は制御困難とされている。今回私達は、広範囲に進展した原発巣を有し、巨大な両側頸部リンパ節転移を認めた症例に対し、根治療法として放射線動注化学療法同時併用温熱療法を施行し、腫瘍の消失をみた1例を経験したので報告する。症例: 61歳, 男性。初診: 平成6年1月21日。現症: 左

顎下に長径 47 mm, 右上顎部に長径 30 mm の固着性のリンパ節を触知する。画像検査で、原発巣は上顎臼後部、軟口蓋、内外側翼突筋及び側頭筋を含み舌根レベルの咽頭壁に及んだ。臨床診断：口咽頭癌 (T4N2cM0)。病理診断：中等度分化型扁平上皮癌。処置及び経過：温熱療法は、両側頸部リンパ節に対し microwave 43℃40分10回施行。同時に放射線動注化学療法として ⁶⁰Co 69.6 Gy 多分割照射, CDDP: 130 mg, 5-FU: 3.5 g, PEP: 25 mg を投与した。以上の治療で、臨床的にも画像的にも、原発巣、頸部リンパ節とも消失し、治療2か月後の現在、再発を認めない。

第32回新潟画像医学研究会

日 時 平成6年11月5日(土)
午後2時~6時
会 場 新潟大学医学部
有壬記念館

I. 一 般 演 題

1) 顎顔面部造影 CT における造影効果について

高瀬 裕志・佐々木善彦 (日本歯科大学)
堅田 勉・外山三智雄 (新潟歯学部)
江口 徹・前多 一雄 (歯科放射線科)

顎顔面部の経静脈造影 CT において、造影剤の投与方法や撮影方法の違いによって、正常組織の造影剤増強効果がどのように変化するかについて CT 値を利用して検討した。対象は頭頸部領域の腫瘍性病変の診断のため CT を行った患者の中で造影剤の投与方法や撮影方法を変え複数回の経静脈造影 CT を行った患者20名の77スキャンとした。組織の造影剤増強効果の程度は、造影前後の CT 値の差を計測して評価した。CT 値を計測した部位は咬筋、外側翼突筋、内側翼突筋、耳下腺、顎下腺、内頸静脈である。

その結果、以下のことが判った。

- ①スキャン開始前の造影剤の投与量が多いと組織の造影剤増強効果も高い。
- ②ヘリカルスキャンと急速静注法(自動注入機使用)の併用では、血管の造影剤増強効果は高いが、他の軟組織の造影剤増強効果が低い場合がある。

2) 上顎洞内病変に対する CT-subtraction の検討

江口 徹・源川 倫子 (日本歯科大学)
佐々木善彦・高瀬 裕志 (新潟歯学部)
前多 一雄 (歯科放射線科)

上顎洞疾患の CT で造影前後のサブトラクション画像を用い、上顎洞内病変の造影パターンを検討した。サブトラクション CT は造影前後の画像をパーソナルコンピュータ上で重ね合わせて作成した。対象は、上顎洞炎42例と上顎癌4例である。造影パターンの肉眼的な分類の結果、A型：造影性なし、B型：線状、C型：不均一の3型に分類できた。また、上顎洞炎の分類の結果は、A型：26例(61.9%)、B型：13例(31.0%)、C型：

26) 当科で経験した舌原発平滑筋肉腫の2例

小野 徹・金子 恭士
武田 幸彦・岡野 篤夫 (日本歯科大学新潟)
土川 幸三・加藤 謙治 (歯学部口腔外科)
内海 治郎 (県立がんセンター)
長谷川 聡 (新潟病院小児科)
(同耳鼻咽喉科)

平滑筋肉腫は、子宮、消化管、四肢の軟組織にみられる悪性腫瘍で、頭頸部領域、特に舌原発の報告例は非常に稀である。今回我々は舌原発平滑筋肉腫を2例経験したので報告する。症例1は8歳女児、1991年9月中旬頃より舌尖部に違和感自覚し、舌尖部に腫瘤を認めたため某病院にて摘出術施行。病理組織学的に平滑筋肉腫と診断され、腫瘍の残存が疑われ化学療法目的にてがんセンター小児科紹介。追加切除の目的にて当科を紹介来院した。症例2は36歳女性、1970年頃より左側舌背部にわずかな腫瘤を自覚するも放置、1991年頃より徐々に増大傾向を認めたため、1994年4月某病院にて生検を施行。病理組織学的に平滑筋肉腫と診断され、腫瘍の残存が疑われ追加切除の目的にて当科紹介来院した。両症例とも拡大摘出術施行し、病理組織学的に摘出物には腫瘍の残存は認められなかった。現在経過観察中である。

II. 特 別 講 演

癌臨床研究の進め方

国立がんセンター研究所薬効試験部部长

西 條 長 宏 先生